

陳 述 書

第1 はじめに

私は、418人のリストの『389番』の被害者です。2007年11月6日、病院から告知を受けて、初めてフィブリノゲン製剤を投与されたことを知りました。16年以上にわたって、国からの連絡も製薬企業からの連絡もなく、放置されて続けてきました。

二度と薬害を繰り返さないで欲しい、私の被害と 생각이、少しでも真相究明と再発防止につながればと思ひ、本日、お話しをさせていただきます。

第2 フィブリノゲン投与と急性肝炎

1 フィブリノゲン投与

私がフィブリノゲン製剤を投与されたのは、1991年3月23日のことでした。当時、小学校1年生の長女、春から幼稚園に入る長男の2児の母でした。3人目の子どもは、妊娠37週目でした。

その前日、破水を起こした私は、病院に行きましたが、死産となってしまいました。その後、私の子宮からの出血が止まらなくなりました。後に知ることとなるのですが、このとき私に、フィブリノゲン製剤3本が投与されました。

2 急性肝炎

私は、3人目の子どもを亡くしたことで、精神的に耐えられないほどのショックを受けていました。目の前にいる子どもや、夫が励ましましてくれることで、何とか自分を保っている状態でした。

4月6日には退院しました。

しばらくすると、黄疸が出て、体がだるく引きずられるように重くなりました。4月20日に出産した病院で診てもらったところ、急性肝炎と診

断され、即入院を指示されました。原因は輸血だと説明されました。医師からは、肝炎は慢性化すると、肝硬変や肝がんに行進するとも説明されました。

この時の入院でつらかったことがあります。出産で主治医をつとめてくれたドクターが、私を廊下の遠くから見つけると避けるようにしていたのです。

私は、こどもの死産の直前に、実の父を肝臓がんで亡くしていました。肝臓がんで苦しむ父の姿から、肝臓がんのおそろしさを目の当たりにしたばかりでした。自分が肝炎にかかったときのつらさは言葉にもなりません。

第3 肝炎と日々

1 インターフェロン

私が病院を退院したのは、1か月以上経ってからのことでした。体はだるく、退院してからも、家事育児も満足にできませんでした。

その後、慢性肝炎と診断され、医師からは、「このままでは5年から20年の命です」と言われたのです。小さな我が子を置いては死ねないと、すがる様な思いでインターフェロン治療に踏み切りました。それは、1991年秋ころだったと思います。

予想を超える副作用が私を襲ってきました。40度近い発熱が続いて、意識が朦朧とする日々でした。

子どものためにも元気な体に戻らなければならない、その一心で副作用に耐えました。

しかし、ウイルスは体の中から消えてはくれませんでした。

その後、私は、ときには毎日のように強ミノ注射を受けるために病院へ通いました。それでも肝機能数値が悪くなって、入院したこともありました。私がいなくても子たちが生きていけるように、それまではなんとか生きてい

かなければいけない、そう思って治療を続けていたのです。

私は、肝炎になったことを恨みました。思うように動かない身体で、育児も思うようにできませんでした。自分自身が生きていくのがやっとでした。

幼い息子からは、「今度いつ病院に行くの?」と言われたこともありました。私は、「明日、注射を打ちに行くよ」と答えました。すると息子は、「ううん、長く行くのはいつ?」と聞いてきました。こどもにもつらく寂しい思いをさせていたとわかりました。

家族には本当に申し訳なく思いました。しかし、運命だから仕方がないと自分に言い聞かせてきました。

こうして、治療の効果がないままに何年もの月日が、いたずらに過ぎていきました。

第4 フィブリノゲン製剤投与の告知

1 病院に対する問い合わせ

それから何年か経って薬害肝炎のことが報道されるようになりました。報道を見て、「私も本当はフィブリノゲンを使われたのかもしれない」と思いました。そこで、一度病院に確認してみましたが、病院からはカルテがないからわからないと説明されました。

私自身、確証のあることではなかったもので、それ以上、カルテを探そうという気にはなりませんでした。

2 病院からの告知

ところが、2007年11月6日、病院からの連絡がありました。フィブリノゲンを使った418人のリストに加地さんも入っている、そう告げられました。

私は、「やっぱりそうだったのか」と思うのが精一杯でした。それ以上は、

頭の中が真っ白になって何も考えられませんでした。

3 娘の言葉

私は、娘に連絡して、418名のリストに入っていたことを伝えました。すると、娘は、真っ先に「お母さん、身体はどうなの？」と聞いてきました。そして、「長生きして欲しい」と涙声で言われました。

娘は、私が肝炎と向き合うことを避けていることを感じとっていました。小さい頃から私に無理をさせまいと、受験勉強中でも出来る事は「かあさん無理しなくていいよ」と言って自分でしてくれたし、買い物した荷物さえも私には持たせなかったりといろいろ気を使いながら、その一方で、肝炎のことは何も口にしませんでした。

しかし、このときようやく、娘がずっと私の体を心から心配していたことに気がつきました。「治療も受けて欲しい、でもお母さんのことを思うと口に出せない」、娘のつらい気持ちにようやく気づかされたのです。

自分一人の命ではない、肝炎から逃げてはいけない、肝炎と向き合わなければいけない。病院からの連絡をきっかけに、再び肝炎と向き合うことができるようになりました。

4 診断結果

私は、連絡を受けて間もなく、病院で診察を受けました。連絡をしてくれた病院は、国や企業を相手に提訴するかどうかをまず尋ねてくれました。

しかし、何よりも先に自分が今、どんな状態かを知りたいと思いました。そこで、検査を受けることを優先させたのです。

肝炎から逃げ続けていた日々は、私につらい現実を突きつけました。

検査結果が出るまで、実は、私は肝炎が治っているかも知れないと淡い期待を抱いていたのです。しかし、実際には、私の慢性肝炎はどんどんと進行し、すでに肝硬変の一步手前までできていたのです。

第5 私の思い—放置された悔しさ

418人のリストは、2002年には製薬企業から国にわたりました。もし2002年に告知してくれれば、そのときに娘や家族の気持ちに気づくことができただろうと思うと残念です。

そうすれば、きっと家族に正直に治療ができていないことを打ち明けられただろうと思うのです。そして、再び肝炎と向き合って、治療を始めることができたと思います。医学の進歩について説明を受け、インターフェロンにも再び挑戦し、今のように肝硬変の手前までなることはなかったと思います。

「一日でも早く知らせてほしかった」。私は悔しくてなりません。

第6 検証委員会に望むこと

国と製薬企業が早期に対応をとっていれば、被害は防げただけでなく拡大しなくて済んだはずです。

引き返せる時は、いくつもあつたはずなのに、そのまま使われ続けたのはなぜなのだろうと思います。

また、これほど広い医療分野で、野放図に使われ続けたのもなぜなのだろうと思います。

さらに薬害被害者が、ただ被害を受けたばかりでなく、放置され続けた点も悲しくてなりません。被害者への告知も、やろうと思えばいつでもできたのに、2002年に企業から418人リストを提出されたときですら、告知をしませんでした。隠しました。

国と企業がなぜ被害を防がなかったのか、なぜ被害者へ告知することなく放置したのか。なぜ、隠したのか。私には、システムだけの問題だけでなく、製薬企業と厚生労働省に、人の命を大切にしようという意識が皆無だったとしか思えません。

この薬害肝炎は、非常に長い期間にわたって被害者を出し続けました。長い間にいろいろな人々が関わってなぜ防げなかったのでしょうか。それは、単なるシステムの問題なのでしょうか。こうした疑問を是非、検証委員会の委員の方々には、明らかにしていただきたいのです。

私は現在、教育現場に身を置いています。教育者として命の大切さを子どもたちに伝えたい、そして、命を大切にする国を残してあげたい、安心して医療を受けられるようになりたい。心からそう願っています。

薬害再発防止は、私たち肝炎原告団、弁護団、そして支援者みんなの願いです。この検証委員会の成果により、薬害が防止されなかった原因、患者が放置された原因を明らかにして、幾度となく繰り返されている薬害が今後は二度と（薬害が）起こらないシステム、そして、一人一人の命が大切にされる社会をぜひ作っていただきたいと思います。

以 上

2008年6月5日

加 地 智 子